

アイヌの埋葬頭位原理は  
縄文時代に遡及するか？

—白川美冬「日本考古学における埋葬方位  
研究の歴史」への応答として—

林謙作「御殿山墳墓群ノ埋葬頭位ヲ論シ併セテあいぬ族ノ他界観ニ及フ」の成果を中心に

瀬川拓郎（札幌大学）

# 白川論文「日本考古学における埋葬方位研究の歴史」の意義

## 1

- 縄文時代から古墳時代、九州から北海道にまで範囲を広げ、これまでの方位研究の業績を、日本列島の通時性のなかで俯瞰した前例のない研究であること。
- 明治時代から現在までの研究業績を俯瞰し、研究上の画期を設定したうえで、それぞれの画期の社会的な背景と限界について考察した前例のない研究であること。
- 方位を**通時性**のなかでとらえる重要性について指摘した前例のない研究として、大きく評価すべきものであること。

## 2

- 遺跡の立地・景観といった個別性を捨象した、方位の全体的・抽象的な議論と、遺跡の個別観察にとどまり、文化全体における方位傾向との接続を失った議論との対立が生み出してきた、研究の停滞性について指摘したうえで、景観的な共通性をもつ濃尾平野の遺跡をとりあげ、地域を単位とする方位研究を試みたこと。
- **景観・地域**に注目し、従来の停滞を克服する具体的な研究指針を示した研究として大きく評価すべきものであること。

白川が示した通時性・景観・地域にもとづく方位の研究指針への応答として、北海道アイヌの埋葬方位原理の歴史性と景観との関連について考えてみたい。

# 1 アイヌの埋葬頭位と他界に関する聞き取り

● 「妊娠した女が亡くなった時、穴の中に安置してから選ばれたフチが…長い鎌で、死体をくるんであるトマの上から…腹に刺して、**ただちに東を向く**」 (平取町) 北海道教委編1988『昭和62年度アイヌ民俗文化財調査報告書』

● 「男の墓標はオプ・クワと呼ばれ、真ん中に上に星と下に月（上弦の三日月文様）を彫り、墨を塗る。…**東に向けて墓標を刺す。星と月を入れるのは、死ぬと天国に行くからだ。天国には星と月があるからだ**」 (静内町) 北海道教委編1992『平成3年度アイヌ民俗文化財調査報告書』

● 「死体は夜に…松明で照らして**夜に墓場へ**もっていき、土葬にした。…墓標を**死者の頭の方、東の方**に刺す」 (静内町) 北海道教委編1992『平成3年度アイヌ民俗文化財調査報告書』

● 「**東は生者のためにあり、西は死者のためにあるのです。したがって太陽が子午線より西に傾くまでは、死者を埋葬することは適切ではなく、…『死者は落日とともに西へ向かって去っていった』と考えねばならない**」

N. G. マンロー2002『アイヌの信仰とその儀式』国書刊行会

● 「他界と現世とでは、昼夜が逆になる。他界の昼の時に送ってやらないと、道に迷い、こちらへ戻るおそれがあるから、夜になって葬式を出す地方のあるのも、この考え方の現れであろう」 久保寺逸彦1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20-1・2

● 「死者の頭の位置については、東向き（釧路・虹別、北見・斜里）、南向き（日高、沙流・ポロサル）など、地方によって違いがあり、方位についても、十勝の伏古などでは、西枕にすれば、兎に生まれ変わるといって嫌い、変死者は、東枕でも、やや北寄りにするなどということもある」 久保寺逸彦1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20-1・2

● 「北見・斜里では墓穴は南北に長く掘り、…死体は北の方に頭が向くようにして穴に入れるという」 久保寺逸彦1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20-1・2

● 「生まれるのは『満ち潮』の時に、死ぬのは『干潮』の時にという」（胆振・登別） 久保寺逸彦1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20-1・2

# アイヌの埋葬頭位と他界に関する聞き取り まとめ

- 1 生者の世界は東（昼）、死者の世界は西（夜）。
- 2 月と星が死者の世界を象徴する。
- 3 死は干潮、生は満潮と結び付いており、**月が死だけでなく生をも掌る。**
- 4 死者は落日とともに西へ向かう。
- 5 そのため葬儀は夜に行う。
- 6 死者は東頭位というが（立ち上がった際に西に顔が向く）、実際には各地で異なる。このような他界観を聞き取った日高においても、南頭位とする記録があり、他界観と埋葬頭位はかならずしも一致しない。

## 2 アイヌの葬儀に関する聞き取り

● 「（葬儀ののち）…**死穢**に汚れ、まだ魔人の潜伏している恐れのある、屋内を浄め祓うことにより、**禍神**を遠い国の果て、**日の沈む方向へ遷却**しようとする…」 久保寺逸彦1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20—1・2

● 「（神への詞）死人の出ましたことは、…まことに私ども人の子の恥じ入る次第であります。併し今は、悪臭の物（病魔の神）も、あなたの村の、村のはずれの場所へ逐い退けてしまい、またa-okte-kamui（ひどい目にあわされて悲しんでいる火の女神）のお家の中もすっかり掃き浄め、戸外の庭のはずれ、外庭の**西の果てへ掃き片づけて**しまいました」 久保寺逸彦1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20—1・2

● 「禱詞を了えると、すぐ、寡婦を戸外へ伴い、先ず手草で身体を打ち祓ってから、涙頭巾を脱がせ、頭に被っていた着物も、着衣も脱がせて、新しい着物に着換えさせる。涙頭巾や着物は、家の前をよぎる道の向こう側、即ち西の方へ遠く運んで焼却する（沙流川筋の部落では、家は西に入口、東に神窓が向く様に建てられ、便所は家の前を通る道を隔てて、西に設けられ、入口は東向きにする。西方は穢れたところであり、禍神を遷却する所と考えられている）」久保寺逸彦1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20-1・2

● 「（大正末か昭和初めに、釧路市の工事中に発見された墓地で唱えられた呪詛）この人間界の明るい光の輝く国の東部に、あなた方は成人して生活していられたのであったが、…今からは人間の国土の西方にあなた方はいかれて、そこにじっと落ち着いて、住んでいただきたい」久保寺逸彦1956「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として」『民族学研究』20-1・2

# アイヌの葬儀に関する聞き取り まとめ

## 1 葬儀は死者に対する絶縁の宣告

- ・ 今後は人間の言葉に耳を傾けるな
- ・ たとえ聞こえても、聞かぬふりをせよ
- ・ 今からは生者と背中あわせの仲になった
- ・ 家族や村人のあったことなど忘れて、祖霊の心をもって他界へ赴け

## 2 死の世界である西方は穢れた世界

- ・ 死者を出した家、村、遺族、会葬者はすべて「垢づく（ケガレ）」とみなす
- ・ 埋葬から帰ると手や顔を洗い、手草で身体を祓う
- ・ 葬儀の翌日、屋内の大掃除をおこない、西方へ掃き片づける
- ・ 喪服等は、部落の西の方でいっさい焼却する
- ・ 死者の出た家を焼き払う
- ・ 死を惹起した禍神を遠い国土の果の西方へ追い払う
- ・ 墓地は集落から離れた場所に設けられる

### 3 アイヌの他界観の歴史的変遷

●縄文時代には集落中央の広場や、人びとが行き交う集落内の通路に沿って墓が設けられ、集落内に殯屋を設ける例もある。死者に対するケガレ観念は存在しない。

●アイヌについても、平安時代（擦文時代）の文化伝統をみせる中世～近世のサハリン・アイヌでは、遺体をミイラ化して屋内に3年祀ったのち墓地に安置する習俗がみられる。北海道の中世のアイヌ墓も、集落内にみられる場合がある。

●実際、アイヌの葬儀習俗では、遺族が服喪のため服や脚絆を裏返しにして着用した、死者の着物は白地とした、死者の衿のあわせは逆にする、などとあり、死装束を裏返しにする習俗は鹿児島市・徳之島など南九州から南島にみられる。また着物を裏返しに着ることを不吉とし、これを戒める俗信は、茨城県など本州各地で見られる。アイヌの葬儀習俗、さらには死者に対するケガレ観は、近世頃に本土の民間習俗が強い影響をおよぼした可能性が高い。アイヌの葬制を単純に縄文時代の事例に援用することはできない。

●従来のアイヌ文化研究は、その変容・変質の歴史的過程をとらえておらず、そのような研究にのっとった葬送の歴史的議論には問題があるとする林謙作の指摘は重要。

●一方、アイヌからの聞き取りでは、月が生死を掌っており、いわば夜の世界・死の世界のなかから生がもたらされる。これは死の世界をケガした世界とし、生と断絶する世界とみなす観念とは大きく異なる。

●林謙作は、祓いの対象である死霊が、どのように正のベクトルをもつ祖霊となったのか、死の成就であり再生に至る過程を示すアイヌの説話・伝承が「欠落」しており、和人による影響のなかでこのような説話・伝承や祭儀が失われてしまったのではないかとする。

●死と再生にかんする上記の聞き取り、および一定期間の殯をともなうサハリンアイヌのミイラ習俗はこの点で重要であり、近世アイヌ社会に伏在した、縄文時代に接続する他界観・葬儀のありかたの可能性もある。

●林謙作は、アイヌの埋葬頭位について、他界と結びついた東頭位は和人からの影響であり、それ以前にはかれらが他界の入口とみなしていた沿岸や内陸の洞窟に頭を向けていた可能性を指摘した（ただし具体的な実証作業は行われていない）。

●たしかにアイヌ、本土海民、琉球人という縄文伝統を色濃く受け継いでいた人びとのあいだでは、洞窟を他界の入口とする観念がみられる。その可能性はありそうだ。

●林は、出自集団における洞窟の方向が、婚出後もその人物の埋葬頭位を規定していた可能性についても指摘している。とすれば、縄文時代の頭位も単純ではないと考えるべきであるが、まずは遺跡ごとに月や周辺の洞窟といった景観指針との方位的関連を、具体的に検討する作業がもとめられているといえよう。